

留学体験記 文藻外語大学 (Wenzao Ursuline University of Languages)

1602136 法律学科 翁長 咲紀

文藻外語大学への留学を決めるまで、私は台湾についてなにも知らなかった。事前に調べを進めていく中で、日本と台湾には歴史的繋がりがあることを知った。日本がかつて台湾を統治していたこと、それは結果的に良い印象を持たれているが、統治初期には統治に反対する人々の武力蜂起がいくつか発生し、死者も出ていること。こんなに繋がりがあっても私は台湾をあまり意識してこなかった。それは自分の視野の狭さを自覚するのに十分であったし、生まれ育った鹿児島から出たこともない私にとって留学は広い世界を見聞するよい機会だとも感じた。

文藻外語大学はその名の通り、主に外国語の学部が置かれた大学だ。学生たちはみな第2言語としての英語、それから各自興味のある言語を専攻している。文藻は各国に姉妹校を持ち、交換留学の受け入れもさかんなため、校内にはいろんな国からの留学生がおり、とても国際色が豊かであった。中国語の能力に大きな不安が残るなか、英語が通じるという環境には安心感があった。ただ、英語もそこまで得意というわけではなかったので、着いてすぐの諸般の手続きなどには苦労した。

大学の講義のなかで、一番印象に残っているのは中日翻訳だ。先にも述べた通り私は、中国語はこんなにありがたうしか話せない状態であったので、この講義はとても難しかった。日本語学科の学生に向けたもので、割合で言えば日本語が多いのだが、会話を聞き取りながら要約し、中国語に翻訳するというのは、当時の私のレベルを遥かに越えていた。毎週のように新出単語と文法と表現が出てくる。毎回課される翻訳の宿題も自力では解けず、ルームメイトに聞いたり、自分で調べたりしてやっとの思いで答案を作った。しかし、その分留学生のための中国語のクラスでは学べない応用的な中国語に触れることができたし、そこでできた友人と互いに教え合うことで理解も深められたように思う。前期、後期と一年間受講し、最後のクラスで口頭発表をしたときに、クラスのみんなから拍手がもらえたのはとても感動したし嬉しかった。

文藻の学生は主体性がある。大学の講義でグループワークや発表が活発に行われているからか、みな自分の意見を主張するのが上手い。積極的に発言をしていくのだ。私自身最初のうちは戸惑ったり、緊張したりしたが、彼らは主張だけでなく人の意見も尊重して受け入れる。私も間違っても発言することをこれからも大事にしていきたいと思った。また、彼らは広く世界を見る視野も持っていた。国際問題や政治にとっても関心があり、普段の話題に上がることも多かった。若者の政治離れが進む日本では、現状を見ないふりして口も出さないくせに出た結果には不平不満を言う。自分の住む世界にしっかりと向き合うことは大切だ。同じ年代として彼らから見習うべきところがたくさんあり、それに気付くことが出来たのは良かったと思う。語学はもちろん、それ以外にもたくさんの学び、発見ができた留学生活になった。

